

母乳育児を推進するための支援策の考察 —日本とカンボジアでの実践体験から—

山本 圭子

研究の目的と方法：

母乳育児は哺乳動物としての原点であり、生命存続のために生まれながらに備わった機能である。人類の歴史においても、子どもを養い、母と子を多くの病気から守り、あたたかく愛情に満ちた母子の絆をはぐくむというすばらしい相互作用をもたらしてきた。そして現代において、多くの母乳に関する研究成果が報告される様になり、母乳育児は栄養学的、免疫学的、精神発達学的、経済学的、生物学的視点からも多くの利点があり、母子にとって最良の育児方法である事が科学的にも広く認識されるようになった。しかし、母乳育児は国によってばらつきはあるが、世界的には衰退傾向にあり、日本においても衰退の経緯の後、その完全な復活には至っていない。

一方日本の多くの女性（95%）は「できれば自分の子どもを母乳で育てたい」と考えているにもかかわらず、生後1～2ヶ月時の日本の母乳率は44.8%、生後2～3ヶ月時では42.3%となっており、「母乳で育てたい」と考える女性のうち、望みどおり母乳育児が行える人は半数以下となっている。望みどおりに母乳育児ができない理由として「母乳が出ない」「母乳が足りない」という声が一般的によく聞かれるが、BFHにおける母乳率が100%近い事や、100万年以上も生き残ってきたという哺乳動物である人類の歴史や生物学的視点から考えても、本当に何らかの理由で母乳育児が出来ない人の割合は、現状よりはるかに少ないのではないかと推測する。

本研究では「母乳育児は哺乳動物である人類にとって自然で当然の行為である」という視点を原点に、なぜ自然で当然の行為であるはずの母乳育児が衰退していったのか、まずは世界と日本のその衰退流れを把握し、その原因を考察する。そして支援の一つのあり方のモデルとして「赤ちゃんに優しい病院推進運動：Baby Friendly Hospital Initiative（以下BFHI）」について取り上げ、筆者が関連した日本とカンボジアの母乳育児支援の事例を通して、どうすれば母乳育児が当たり前を実現できるのか、世界共通の基本方針の視点から明確にし、母乳育児の実践において必要な「正しい知識」と「適切な支援」及び「支援のあり方」を探る事を目的とする。

論文の構成：

序章	第一節	研究の目的と背景	1
	第二節	先行研究	3
第一章		母乳育児の重要性	6
	第一節	精神発達学的視点から見る母乳育児	6
	第二節	出産施設における母子同室の重要性	10
	第三節	母乳育児と人工栄養の意義	15
第二章		母乳育児を取り巻く社会的背景	22
	第一節	世界における母乳育児を取り巻く歴史的背景	22
	第二節	日本における母乳育児を取り巻く社会的背景	30
第三章		日本における母乳育児推進に向けての取り組み	39
	第一節	日本における母乳育児の歴史的概要	39
	第二節	「笠松産婦人科・小児科」における母乳育児支援への取り組み	43
	第三節	母乳育児支援の重要性	49
第四章		カンボジアにおける母乳育児推進に向けての取り組み	55
	第一節	カンボジアの保健医療概要	55
	第二節	カンボジア国立母子保健センター (NMCHC) における母乳育児	60
	第三節	NMCHC における母乳育児状況調査	67
	第四節	カンボジアにおける母乳育児阻害要因について	71
第五章		結論	76
	第一節	BFHI の意義	76
	第二節	母乳育児に関する「正しい知識」と「適切な支援」	79
	第三節	母乳育児支援に関する今後の課題及び提言	84
謝辞			90
参考・引用文献			91
参考資料			100

論文の概要：

母乳育児に関連した歴史的背景、社会背景、政策レベルでの視点をすりあわせてみる事で、一見対極にある様に見える母乳育児と経済社会に、関係がある事が見えてくる。日本において、そして世界において、母乳育児が大きく衰退していった要因の一つに、人工乳の販売戦略の問題が挙げられる。近代に入り、発展途上国において、栄養不良児対策として人工乳が配布され、その結果、衛生的な水や哺乳ビンが手に入りにくい発展途上国においては下痢や感染症、そしてさらなる栄養失調により死亡する乳幼児が増加した。これらの教訓を生かし、真に乳幼児の健康を願う国際機関においては栄養不良児対策の方針を変更し、栄養学的、免疫学的にも優れている母乳育児を推進するという活動を展開するに至る。しかし、人工乳メーカーは、これらの「適切な条件の元で人工乳を利用しなければ乳幼児死亡が増加する」というという事実を体験しながらも、自らが生き残るためには販売競争に勝ちすむ必要があり、非倫理的と批判される販売活動を引き続き展開し続ける。

人工乳メーカーにとってのライバルは「母乳」であり、市場を母乳に代わり独占していく必要があり、巧みな戦略により各国の政治機関や医療機関に入り込み、医師をも巻き込み人工乳を勧める様働きかけている。先進国における医療機関の多くは、すっかりこの様な乳業メーカーの戦略に巻き込まれ、社会システムとして組み込まれてしまっている。この様に母乳育児衰退の根本的な原因は、母親の体質や意思、選択等の個人レベル問題ではなく、世界における経済発展や企業利益に関連した影響を受けた結果であるという事実をまず知る事が大切である。先行文献研究において、まずこれらについて整理する。

第一章においては、母乳育児の重要性及び母子の身体的接触（スキンシップ）の重要性、特に生後早期からのスキンシップや母子密着育児が母子にとってどれ程重要な意味を持つのかを整理する。早期からのスキンシップが母子にとって大きな意義がある事は様々な研究から証明されているが、それらを自然に、児の欲求に応じて適切に行うのに最適なのが母乳育児である。また逆に、早期からの授乳を含む母子のスキンシップを行う事で、母親の体内で産生されるホルモン分泌に影響を与え、母乳分泌量を促進、増加させ、同時に母親の出産後の身体が通常の状態に戻るのを助ける等の母子相互作用が期待される。母子のスキンシップを促進し、母子の愛着形成や乳幼児の神経発達にも重要な役割を果たす母乳育児の主な利点について論じる。

第二章では、世界、そして日本における母乳育児を取り巻く社会的背景について概観する。本来、母乳育児は科学的裏づけによる「説得」や、人工乳か母乳かを選ぶという個人の「選択」の行為の結果ではない。昔も今も世界のどこであっても変わらず、母乳育児は母子にとって、人類にとって、自然で当たり前の育児方法である。人間の子どもは牛の乳ではなく、人間の乳で育つのが最適である。この当たり前の真理が世界において、そして日本において、いつ、なぜ、どのように変わっていったのかを探る。そして同時にいまや国際スタンダードとして、世界において推進、勧告されている BFHI について考察する。

第三章では、日本における母乳育児の歴史と現状について整理すると共に、BFHI に基づく母乳育児支援のあり方が、いかに有効に機能しているかという事例を紹介する。

そしてBFHの事例から、母乳育児に関する「正しい知識」と「適切な支援」とは何なのか、考察すると共に日本における今後の課題について明確にする。筆者は、自身のBFHにおける勤務経験から、母乳育児に関する「正しい知識」と「適切な支援」さえあれば、多くの女性は望み通り母乳育児を実践できると考えるが、これらの重要性及び支援のあり方について、BFHIの視点からその有効性について考える。

第四章では、カンボジアのBFHIの事例を取り上げる。カンボジアは筆者が2年半に渡り実践を行ってきたところであり、かつ今後急速な人工乳育児が進むことが予測されるという意味で典型的な後発途上国である。この2点から同国を考察の対象とする。まずはカンボジアの保健医療概要について整理した後、筆者がJICA母子保健プロジェクト母乳哺育専門家として派遣された「国立母子保健センター:National Maternal and Child Health Center」(以下:NMCHC)におけるBFH認定を目指した取り組み事例について検証する。

カンボジアでは96%の母親が母乳育児を行っており、地方ではほとんどの人が当たり前の様に母乳育児を行っている。しかし、首都プノンペンも経済発展の渦中にあり、カンボジアの伝統文化である母乳育児にも変化の兆しが現れている。NMCHCにおけるBFHIに基づく母乳育児推進への取り組み事例をふまえ、日本とは背景や文化の相違するカンボジアでのBFHIに基づく母乳育児支援の有効性について考察する。

第五章では、母乳育児が当たり前に実施、継続されるためには何が大切なのか、日本とカンボジアにおけるBFHIの実践事例から、母乳育児の実践において必要な「正しい知識」と「適切な支援」を明確にする。そして日本における母乳育児阻害要因を探り、それらの課題について考察する。母乳育児衰退の原因は、今まで信じ込んでいた母親個人の体質や意思、選択等の個人レベルの問題ではなく、経済成長や政治的要因により大きな影響を受けてきたという事実は今や明らかである。この事から日本が体験してきた政治的、社会的な母乳育児阻害要因とその課題についてカンボジアと共有し、歴史的文化的相違の中でも共通する母乳育児支援のあり方を明確にする。